

会社の宝を大切に、そして磨き続けて



有限会社三建プロジェクト
(八戸市)
代表取締役

三浦 時子

建築から建具へ

当社は1930（昭和5）年、宮大工をしていた義父の三浦與吉が三浦建築として八戸市根城で創業したのが始まりです。

義父は創業当時、宮大工として「腕のいい與吉」との評判を頂いていたようですが、喘息を長いこと患っており、高い場所に登ることが困難となってきたことから、戦後の1954（昭和29）年、建物を建てる大工から建物内の戸や障子、襖^{ふすま}などを作る建具職人に転向し、事業所名も三浦建具製作所に変更しました。

その後、サッシメーカーに勤務していた長男の強志が父の体が弱ってきたことを心配し戻ってきた機会を捉え、後継者とすべく技術の伝承を図り、1965（昭和40）年に代替わりし強志が代表に就任しました。そして私は、その3年後の1968（昭和43）年に強志と結婚し三浦家に嫁いできました。

その当時はまだ建具の既製品はなく、住宅

の新築の都度建具の注文が入ったほか、代表のサッシメーカー勤務時代の技術を生かし、窓枠などに使うアルミ建具を開発するなど事業は順調に拡大し、1970（昭和45）年には有会社として法人化し強志が社長に就任しました。

住宅建具から商業建具・内装工事へ

ところがその後、八戸でも大手メーカー等による建売住宅が普及し始め、アルミ建具も大手の既製品が台頭し、注文建具の需要が減り始め、このままではじり貧になると考えた社長は、住宅用の建具製作から店舗用や病院、ホテルなどの施設用の木製家具・器具の製作と内装・木工事業に舵を切りました。そして1990（平成2）年には社名を(有)三建プロジェクトに変更し、大型木工品製作には手狭となった根城の作業場を八戸インターに近い郊外の現在地に移転し体制を整えました。

また、個別受注（特注）で手間がかかるため職人を増やす必要があり、募集を出したところ、他の建具店を退職した職人さんが集まって来てくれました。他の建具店さんはやはり仕事が少ないようになっており、「三建に行けば忙しそうで腕を振るうことができそうだ」と皆さん思っただけの応募でした。

度重なる災禍と社長の死

こうして新たな分野での事業に邁進するなか、1998（平成10）年7月、火事により作業場が全焼しました。

木製の仕掛品をはじめ、器具や設備もすべて焼失し、社長も私も途方にくれましたが、機械器具の業者からは支払は何年かかってもいいからと言って納入して頂き、建設業者からも鉄骨は寄付するから再建すると、多くの方から背中を押していただき、乗り越えることが出来ました。

そうして一段落ついたと思った矢先の2001（平成13）年12月に、今度は大口取引先が破綻し、多額の焦げ付きが発生しました。

この取引先は、東北や首都圏の大手ホテルなどの大口の内装工事を請け負い、多くの木工事を当社に発注して頂いていたほか、技術面でも指導を仰ぐなど、大変お世話になった取引先でした。銀行さんからは、大口先に頼りすぎるのは問題があるよ、と注意を受けてはいましたが、寝耳に水でした。

私は三浦家に嫁いで以来、法人化以降も仕事は職人さんへの給与支払をはじめ、経理全般を任せられていました。原材料仕入や器具購入等の代金支払、そして銀行借入の返済もそれまで一度たりとも一日たりとも遅らせたことはありません。それが私の仕事と肝に銘じて従事してきましたが、今度ばかりはもうピンチ、と心が折れそうになりました。倒産防止共済からの借入等でなんとか凌ぐことが出来ましたが、その後の返済も心が折れそうになるほどの厳しさでした。

そしてその3ヵ月後の翌年3月、社長の強志が59歳で死去しました。負けず嫌いで強気、何でも一番を目指し、いくらお酒を飲んでも翌朝一番に起きて仕事をしていました。取引先には伏せていましたが、胃がんが見つかり、2年ほど療養を続け、災禍も重なり、精根を使い果たしたのだと思います。

社長の死を受け、急遽私が社長に就任したのですが、経営の「け」の字もわからない、借

金は山ほど残っている、この先どうすればいいのかと、夜も眠れない日々が続きました。

困難を乗り越えて

そのような困難な状況を克服できたのは、取引先と会社の職人さん方のおかげです。

倒産した取引先を退職した従業員の方々が新たに会社を立ち上げ、「三建さんにはこれから続けてほしい」と言ってきたのです。

そして職人さんたちは、火事になっても、多額の借金を背負っても、そして社長が死んでも誰一人やめることなく、さらに腕を磨き

会社を盛り立ててくれました。

死んだ社長は生前、「職人はわが社の宝物だ」と言って面倒をよく見て、皆で飲み食いし、苦楽を共にし、家族主義に徹してきました。職人さんも宮大工の創業者から続く当社の技術力と前社長の精神を受け継ぎ、さらに多くの職人が切磋琢磨し、東北でも数少ない木工職人集団を作り上げてきました。

IT等による技術の進歩があっても、最後の仕上げに職人の手仕事は欠かせません。おかげさまで、その技術力は東北・関東をはじめ多くの方々から評価をいただき、国の重要文化財に指定されている盛岡市の岩手銀行赤レンガ館の木工関係の保存修復工事も担当させていただきました。

いま、健康ブームや自然美との調和の魅力が見直され、木工製品や木工設備を導入する商店や各種施設が増えており、追い風となっています。一方で人手不足は深刻で、木工職人を目指す若者を見つけ出すのは容易ではありません。

当社でも職人の高齢化が進んでいます。職人のご息が入社し、腕を磨くため一旦退社し東京で修業したのち復帰するなど、新たな芽も育ってきております。

前社長の死去から17年ほど経ちましたが、様々な困難を乗り越えてきた職人集団の技術力に裏打ちされた当社の信用力をさらに高め、新たな世代へのバトンタッチを図りたいと考えております。



当社が手掛けた岩手銀行赤レンガ館の内装の一部